尾張旭市いじめ・不登校対策委員会　　令和４年９月吉日発行

いふだより

このたよりは、尾張旭市内の小中学生の子をもつご家庭や、教職員のみなさん、地域の方に向けて発行しています。

第2号

８月５日（金）、尾張旭市文化会館あさひのホールで教育講演会を開催しました。今年度は、講師に心理カウンセラーの内田良子（うちだりょうこ）氏をお招きし、「子どもの立場から理解しよう～いじめ、不登校で悩み・傷つく子どもたち～」というテーマで講演をしていただきました。内田氏は、子ども相談室「モモの部屋」を長年主宰されるとともに、東京都内保健所で心理相談員を務められ、多くの子どもたちの悩み相談に携わってこられました。また、「『不登校』『ひきこもり』の子どもが一歩を踏みだすとき」、「登園しぶり、登校しぶり」（ジャパンマシニスト社）などの著書も執筆されています。

昨年度同様に参加人数を減らし、感染防止対策を講じながらの開催ではありましたが、教員・関係機関・保護者・保育園関係者を含む８８名の参加者は、それぞれの経験や現在直面している課題を思い浮かべながら、思い思いに耳を傾けていました。以下に、講演内容を抜粋して紹介します。

子どものＳＯＳを受けとめる

- いじめにより、子どもが命を絶つことがあってはいけない。子どもが苦しいと感じたとき、最後の一人として思い出してもらえるような関係をつくることを心がけた。子どもの立場に立ち、親とともに考えることが一番大切である。
- 不登校傾向の子どもは、体育の授業や教室移動の授業（図工や音楽など）で具合が悪くなることが多い。教室はそれぞれの机や椅子が決まっているので教師の目が届きやすいが、グループ活動になると見えない所でいじめが起きやすい。例えば、ドッジボールは、いじめの格好の舞台である。

不登校はどの子どもにも起こりうる

- 子どもが休みがちになると、学校側は発達障がいを疑い、発達検査を勧めることがしばしばある。しかし、不登校（傾向）と発達障がいを切り分けて考えなくてはいけない。最近は、コロナ不安で欠席する子どもも増えている。
- 不登校の子どもが出るクラスは、いじめも起きやすい。深刻ないじめは、学校で起こっている。知らず知らずのうちに、担任がいじめに加担してしまっているようなケースもある。また、担任の不適切な対応や指導により、不登校になってしまう子どもも多い。

子どもたちが求めている不登校対策とは

- 様々な理由で学校に行きたくないと思っても、子どもたちは休めないのが現状である。しかし、子どもにも学校を休む権利があるので、教師も親もそれを理解してやらなければいけない。そして、休んだことで後ろめたさを感じたり、不利益を受けたりすることがないように努める必要がある。

・　子どもの数は年々減っている一方、長期欠席（不登校）の数は右肩上がりで増えている。国が予算を計上し、本気になって対応すれば不登校をなくすことも可能である。ところが、今は間違った不登校対応をしている。「不登校未然防止対策・早期復帰対策」は、不登校を増加させる一因である。早期に学校に戻そうとしたり、体だけ学校に戻したりしても意味がない。トラウマや心の傷からの回復が優先されるべきである。
・　学校に行きづらいと感じた時、「ただ一言、休んでいいよと言ってほしかった」というのが子どもの思いである。

【参加者の感想より】

・　とても考えさせられる講演であった。教員として、子ども一人ひとりの先のことを考えて不登校にならないように常に考えているが、休むことを子どもがどれだけ望んでいるかがよくわかった。
・　これまで、不登校の児童をいかに学校に戻すべきかを考えていたが、そうではなく、いかに幸せになれるのかを考える必要があるとわかった。
・　保健室や学校において、不登校や登校渋りの子に対して、再び学校で気持ちよく過ごせるようになることがよいと思って、様々な角度からサポートしてきたつもりだったが、何よりもまず「安心して休める」ことが大事なのだということが、繰り返し講演の中でも話されていて、今一度対応の仕方を見直していかなければいけないと思いました。子どもにも権利があるので、それをむやみに奪ってはならないと考え直させられました。
・　「休んでいいよ」の言葉、教師としてしっかり心にきざみ、日々の実践に取り組みます。かなり大きな発想の転換も必要なのだと感じたお話でした。
・　担任の立場として、言葉では言い表せないほどの無力感、責任感を強く感じました。学校の魅力、クラスの魅力、担任としての魅力をきちんと子どもに伝えられるようになりたいです。
・　すべての話に共感できませんが、自分の考え方や対応についてじっくりと振り返り、これからの指導で気をつけていくべきところを明確にしていきたい。生かせるところは生かしていきたいと思います。
・　子どもの権利について、子どもは知らない。自分の子や周り、近しい親子にはその権利を知ってもらい、子どもの選択肢を増やし、生きやすい環境を子どもや周りと一緒に作っていきたいです。
・　子どもと関わる立場として、一人の親として普段から子どもの話を向き合って丁寧に聞くこと、子どもの思いや意見を尊重し、受け入れることを大切にしなければならないと思いました。

不登校は事象であり、状況を多角的に見る必要がある。背景には本人の特性、家庭環境、教師や友人との関係、学校、専門機関、地域の体制など複雑に絡んでいる。SOSのサインを出した子どもにきちんと向き合い、否定をせずに意向を尊重して選択を委ねる。「休養」は一つの方法ではあるが、その期間を支える体制や将来を見据えた具体的な支援方法を考えることは必須である。学校現場では、子どもたちや保護者の方々の対応に、一生懸命に頑張っている教師の姿が見られる。今後も、子どもの最善の利益のために真摯に向き合い、家庭と学校が協働で取り組むためにサポートしていきたい。　　スクールソーシャルワーカー　酒井　多輝子